

『教行信証』に見る自然の思想

——「自」の読みを通して——

山 田 恵 文

はじめに

親鸞は、その主著『教行信証』においてみずから「自然」を解説することはない。その一方で親鸞九十年の生涯の中、晩年と言える七十六から八十六歳の間に精力的に著述した仮名聖教に、たびたび「自然」に対する解説を加え、更には親鸞八十六歳の時にその弟子顕智に語ったとされる法話が、「獲得名号自然法爾御書」（以下「自然法爾」法語と記す）と呼ばれて今日まで伝わっている。^①特にその法語には、親鸞最晩年の心境が端的に吐露されていると見なされ、これまで多くの研究者に注目されてきた。

近代においてその先駆的論文として挙げられるのが、森

竜吉氏の「「自然法爾」消息の成立について」である。氏はその中において、この法語が果たした社会的機能という側面から「自然」を論じているが、基本的に親鸞の「自然」とは「最後に到達した境位」を表現したものであるとして、論考を進めている。^②この理解を初めとして、後の論者も例えば「信の最終的境位を端的に吐露した法語である」^③とか「親鸞が最後に到達した世界」であり「心豊かに、安心しきって生きぬいた」^④という心境を表現したものであるといった見解を提出している。

ここに掲げた以外にも親鸞の「自然」に対しては、枚挙にいとまがない程、種々に論じられているのであるが、基本的には晩年の思想として前提的に考察していることが共

通点であると言えよう。しかし晩年の思想であると前提的に論じることによって、「自然」とは親鸞の晩年に到つての特別な思想を表現したものではないかと、ある種の先入観をもつて受け取られることになりはしないであろうか。論者によって、「自然」の解釈に差異が感じられるが、それは「自然」という語の性格によるためではあるが、また「自然」を晩年の思想と先入観をもつて考察するところに起因しているとも思われるのである。つまり、晩年の特別な思想と捉えることによって、親鸞の根本主著である『教行信証』との関連が見えにくくなっているために、論者の立場によって解釈が多岐に涉つているのであると思われるのである。

確かに「自然」とは親鸞の晩年に特徴的に表現された言葉であるが、そこに託された思想内容は、決して晩年に突出した思想ではなく、親鸞の一貫した思索であると考えるべきではなからうか。親鸞の語る「自然」を正確に探究してみれば、それは『教行信証』に引かれた経論釈を再度解説していく中で表現された言葉であり、特に『大無量寿経』の「自然」を背景とした術語であることが分かる。ならば、それは決して晩年に限って考察すべき課題ではなく、むしろ親鸞の一貫した思想内容が託された言葉であるとの

視点を持って、究明すべき用語であろう。

この視点に立つて考察していくとき、その一つの手法として『教行信証』に引文されている経論釈中の「自然」の意味を検証する必要があるであろう。しかし、小論では親鸞の自然の思想がよく現れている事例として、親鸞の「自」の読みに注目していきたいと思う。「自」には、「みずから」と「おのずから」の二通りの読みがあるが、親鸞は両者を厳密に区別しているのである。当然「おのずから」と読む場合、そこには親鸞の自然の思想が表現されていると言える。よって、「おのずから」と読む箇所を検討し、その内容を踏まえて「自然法爾」法語の思想内容を究明していきたい。

一、

我々は「自」を訓読するとき、「みずから」と「おのずから」とに読む。当然「おのずから」と読むとき、そこには読み手の自然の思想が表現されていると言えよう。しかし、本来漢語において「自」を両者に厳密に区別することは出来ない。あえて漢語の「自」を「みずから」と「おのずから」に訓じ分けるとすれば、「みずから」という時には、行動の主体に意識や努力が伴うことを表し、「おのず

から」という時にはそれが伴わないのではなからうか、ということが容易に想像出来るであらう。つまり「自」に意志的努力が含まれるか含まれないかによって「みずから」か「おのずから」かに分けられるということである。その結果、この読み分けは文脈上で判断するしかなく、その訓じ方によって読み手の思想が反映されると言えるのである。では、親鸞は『教行信証』に引文した様々な経論釈の「自」をどのように読んでいたのであらうか。

『教行信証』には多くの「自」があるが、親鸞はそのほとんど全てに「みずから」か「おのずから」の読みを付している。その中「おのずから」と読むところは十四カ所見えるのだが、その数例を検証して親鸞の自然の思想を解明していくこととしたい。

親鸞が「自」を「みずから」と「おのずから」とに厳密に読み分けをしている事例として、まず「信巻」に引かれた「如来会」の文を見てみよう。

又言如来功德佛自ハノミミ知シロシヤリ 唯有マシク二世尊ニ能開示シタマフ 天龍夜叉所ヲリル不ハ及ハ二乘自オウツラタツ 絶ニ於ニ名言ヲ

〔定親全〕一・九八頁)

これは、『大無量寿経』で言えば、東方偈の「如来智慧海 深廣無涯底 二乘非所測 唯佛獨明了」^⑦に相当する箇

所である。ここに記されている「自」について親鸞は「みずから」と「おのずから」とに明瞭に訓じ分けている。この訓じ分けにはどのような意味があるのであらうか。はじめの「自」については、仏自身を指すのであるから「みずから」と読み、後の「自」は、声聞縁覚の二乗にとつて如来の功德は思議を超えたものである、もとより説くこと出来るものではないから「おのずから」名言を絶つと読んでいるのである。同じように、「真仏土巻」に引かれた

『大阿弥陀経』の文を見てみると、

本其前世宿命求道ト爲タリシニ 菩薩照所願功德各自オウツカラ
有リ二大小ニ至テ其然シレバウシテ 後・作ルニ佛ニ時ニ各自ミツカラ得ニ之ヲ是
故令ニ光明轉ウタ不ニ同等ニ諸佛威神同等ナルナラクノミト耳

〔定親全〕一・二三〇—一頁)

とあるように、ここでも同一文中で二つの「自」が「みずから」と「おのずから」に訓じ分けられているのである。諸仏の光明に近遠がある理由を述べる中で、前世の菩薩時の功德に「おのずから」大小があり、仏になる時に「みずから」これを得るといふ。つまりこの引文では仏については「みずから」といふ、一方菩薩の所願によつておのずと大小となる功德については「おのずから」と読んでいるのである。先の『如来会』もこの『大阿弥陀経』も、仏自身

について言うときには「みずから」と読んでいることが分かる。そして「おのずから」と読むとき、そこには果報を得るにあたっての思議を超えたはたらきが表現されていると言えるのではなからうか。親鸞のこの「自」の読み分けには如何なる定義があるのか、『唯信鈔文意』にある親鸞自身の解説を見てみたい。

如來尊号甚分明ニククセシム 十方世界普流行オウツクワリヘタマフ

但有テスル稱ミク名ミ皆得ク往コトヲ來ヘタマフ迎ム

(『定親全』一・五〇頁)

「自來迎」といふは、「自」はみづからといふ、彌陀、無数の化佛、無数の化觀世音・化大勢至等の无量無数の聖衆、みづからつねにときをさらはず、ところをへだてず、眞實信心をえたる人にそひたまひてまもりたまふゆへにみづからとまうすなり。また「自」はをのづからといふ、をのづからといふは自然といふ、自然といふはしからしむといふ、しからしむといふは、行者のはじめてともかくもはからはざるに、過去・今生・未來の一切のつみを善に轉じかへなすといふなり。轉ずといふは、つみをけしうしなはずして善になすなり、よろづのみづ大海にいればすなはちうしほとなるがごとし。彌陀の願力を信するがゆへに、如來の功德

をえしむるがゆへに、しからしむといふ。はじめて功德をえんとはからはざれば自然といふなり。

(『眞聖全』二・六二三頁)

「行卷」に引文している法照の『浄土五会念仏略法事儀讚』(以下『五会法事讚』と記す)の一文に対する註釈であるが、「行卷」では「自來迎」の「自」に「おのずから」と読みを振っておきながら、この『唯信鈔文意』ではわざわざ「みずから」と読む場合の解説もしている。これによれば、仏菩薩の聖衆が主体である場合、あえて「みずから」と読んでいることが分かる。続いて「おのずから」と読む場合、逆にしからしめられる立場、つまりはたらきを受ける立場を主体にした読み方であると言える。つまり行者の立場に立つて、転成をもたらず諸仏・諸菩薩のはたらきを示しているのである。繰り返せば、親鸞は「おのずから」と読むことによって、衆生の立場に立つて如來のはたらきを明瞭にしていると言えるのである。

次に、親鸞が「自」の読みを特に意識していることを示す箇所を見てみよう。『大経』には願力自然と称される、親鸞が特に重視した教説があるが、その直前に次の文がある。

又其國土ニ、微妙安樂ニ、清淨ナルコト、若レ此ノ、何レ不レ力メテ爲レ善ヲ、

念^{ヒテ}道^ニ之^{シテ}自然^ラ著^ラ於^ク無^ク上下^ニ洞^{シテ}達^ス無^ク邊^際際^ニ宜^{シク}各^々
 勤^{メテ}精^{シク}進^ム努力^ヲ自^ラ求^ム之^ヲ。(『真聖全』一・三〇—一頁)

これは、如来浄土の因果・衆生往生の因果を説き終えて、
 釈尊が弥勒に対して三毒五悪を説き始めるところの冒頭に
 あたる箇所である。微妙・安楽・清浄なる仏土を、各自が
 精進努力して「みずから」求めるのがよい、とあるように、
 『大経』当面の意味では、釈尊が衆生に努力精進を求める
 文意であるが、親鸞は直接この文には言及していない。し
 かし、この教説を註釈した憬興の『無量寿経連義述文贊』
 (以下『述文贊』と記す)を「行巻」に引いて了解を示し
 ているのである。

又云人・聖國・妙^{ヘナリシカラムサ}誰^ニ不^ニ盡^ニ力^ヲ作^{シテ}善^ヲ願^{セヨ}生^ヲ因^ニ善^ニ
 既^テ成^{シタ}ヘリ^ラムヤ^オ不^ニ自^ラ獲^ユ果^ヲ故^ニ云^フ自然^ト不^ニ簡^ニ貴^ニ賤^ヲ皆^ク
 得^ニ往^ニ生^ニ故^ニ云^フ無^ク上^下下^ト。(『定親全』一・五六頁)

親鸞は『述文贊』から直ちに引くことはせず、自身の意
 に沿って必要な部分だけを引文している。もともとこの憬興
 の註釈では、「何不力爲善者勤脩往生之因^⑧」という文があ
 るように、『大経』の先の教説を、衆生に往生の因を勧め
 る文であると示されている。よって憬興の趣旨から言えば、
 当然ここの「因善既成」も、「善によって既に成ず」と読

み、衆生自身が修する善によって既に完成している、と了
 解すべきであろう。ところが親鸞は、この「因善既成」を
 「善によって既に成じたまえり」と読んで、如来の善によ
 って既に(浄土が)完成している、と了解している。そし
 て如来の修善によって浄土が完成しているのであるから、
 どうして衆生は「おのずから」証果を獲ないことがあるう
 か、という意味で読み取っているのである。ここで注目す
 べきなのが、当初親鸞はこの「不自獲果」の「自」に「ミ
 ツカラ」と読みを振っているのであるが、後にこれを「オ
 ヲツカラ」に朱で訂正していることである。前者の「ミツ
 カラ」の読みのままでは、如来自身が証果を獲ないことが
 あるうか、という意味になる。しかし、後者のように「オ
 ヲツカラ」と読むことによって、証果を獲るのが衆生であ
 ることと、その証果が如来のはたらきによって果たされて
 いくことを明瞭にしたのである。つまり如来のはたらき
 によって衆生が証果を獲る道理を言うために、「自」を
 「おのずから」と読んでいたのである。そして続けて「故
 云自然」とあるように、この証果を獲る道理を「自然」と
 いうのである、と親鸞は「自然」に対する見解を表明して
 いるのである。以上のように読むことによって『大経』の
 「自然」の意義、即ち如来の本願力としての「自然」の意

義を明瞭にしていると見えよう。

二、

では、このように解説された本願力の「自然」は、衆生に一体如何なる証果をもたらすというのであろうか。

其佛^ノ本願力^ヲ聞^テ名^ヲ欲^ス往^セ生^ト 皆悉^ク到^リ彼國^ニ
自^ラ致^ス不退轉^ニ (『定親全』一・一八頁)

これも「行巻」に引かれた『大経』の「東方偈」の一文であるが、この「自」を親鸞は「おのずから」と読んでい

る。『大経』にはそもそも多くの「自」があるのであるが、この「東方偈」の一文を挙げて、あえて「おのずから」と読むところに親鸞の自然の思想が表れていると言えよう。この一文について親鸞は『尊号真像銘文』で次のように解説している。

「自致不退轉」といふは、自はおのづからといふ、おのづからといふは衆生のはからいにあらず、しかからしめて不退のくらゐにいたらしむとなり、自然といふことば也。致といふは、いたるといふ、むねとすとといふ、如來の本願のみなを信ずる人は、自然に不退のくらゐにいたらしむるをむねとすべしとおもへと也。不退といふは、佛にかならずなるべきみとさだまるくらゐ也。

これすなわち、正定聚のくらゐにいたるをむねとすべしと、ときたまへる御のりなり。

(『定親全』三・七六一七頁)

親鸞はこの「自」を「おのずから」と読み、「自然」という言葉であると釈している。そして不退の位に至ることが「自然」になさしめられるという見解を示しているのである。つまり本願の名号を信ずることによって、不退の位が果たし遂げられる道理を「自然」と了解しているのである。親鸞は「不退転」と「正定聚」を、ここに示すように同一の意味に取り、そして「難思議往生」と標拳に掲げる「証巻」冒頭において

煩惱成就^ル凡^夫生^死罪^濁羣^萌獲^ニ往^相回^向心^行 卽^ニ時^ニ入^リ
大乘^正定^聚之^數 住^ニ正^定聚^ニ 故^ニ必^ニ至^ニ滅^度

(『定親全』一・一九五頁)

というように、真実の証果を「住正定聚故必至滅度」であるとす。自然に果たし遂げられる証果とは、親鸞の了解から言えばこの「住正定聚故必至滅度」以外の何物でもない。先に確認したように、「正定聚」が自然に実現するものであるなら、当然「必至滅度」も自然であると証知していたと言えるであろう。『観経疏』「必得往生」の「必」と『大経』「必得超絶去」の「必」とを親鸞は次のように註

釈する。

かならずといふは自然に往生をえしむと也、自然といふはじめてはからはざるこゝろなり。

〔尊号真像銘文〕『定親全』三・九四頁

かならずといふはさだまりぬといふこゝろ也、また自然といふこゝろ也。

〔尊号真像銘文〕『定親全』三・七七頁

ここに記されているように親鸞は「自然」には「必」という決定性があることを明らかにしている。ここに「住正定聚故必至滅度」という証果が願力自然にもたらされるといふ親鸞の見解が明瞭になったであろう。それにしてもこの「必」を「自然」とする独特な了解は一体如何なる教説からもたらされたのであろうか。この背景として考えられる二つの文を挙げておこう。「行巻」所引の「十住毘婆沙論」と「信巻」所引の『樂邦文類』とである。

今當具説无量壽佛世自在王佛〔乃至有其餘佛〕是諸佛世尊現在十方清淨世界・皆稱名憶念阿彌陀佛本願如是若人念我稱名自歸即入必定得阿耨多羅三藐三菩提是故常應憶念

〔行巻〕『定親全』一・三〇一頁

〔樂邦文類〕後序曰修淨土者常多得其門

徑造者無幾論淨土者常多得其要而直指者或寡矣會未聞有以自障自蔽為說者因得之言之夫自障莫若自蔽莫若疑但使疑愛二心了無障礙則淨土一門未始間隔彌陀洪願常自攝持必然之理也

〔信巻〕『定親全』一・一三六頁

ここには「自然」とは如何なるはたらきをいうのか、親鸞の了解が如実に表されていると言えよう。『十住毘婆沙論』では「自」を「おのずから」と読むことによつて、「必定」が自然に果たし遂げられていくことを示している。この引文を背景として、「正信心仏偈」の龍樹讚で「憶念彌陀佛本願 自然即時入必定」と表現し、また『唯信鈔文意』で「憶念自然なるなり」と著述していることは言うまでもない。また、『樂邦文類』の文では、疑・愛の二心も妨げにならないというように、弥陀の本願力が衆生の自力の執心を問題としないことを表そうとしている。そして「常におのずから摂持したまう」弥陀の洪願とは、衆生に証果をもたらすという点で、「必然の理」であるというのである。まさに「自然」を「必」とする了解はこの二文に導かれたものであると言えるであらう。衆生のはからいを超えた弥陀の本願力のはたらきは、衆生にとって必然の道

理なのである。

三、

以上のように『教行信証』に引文する経論釈の「自」を「おのずから」と読むところから、また、「必」を「自然」と理解するところから、親鸞は自然の思想を展開していったと推察出来るのである。「おのずから」と読み、「自然」と理解することによって、親鸞自身一体如何なる仏道に立っているのかを表明していると言えよう。具体的に言えば「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る」という難思議往生が実現する道理を「自然」をもって表現していると言えるのである。よって親鸞の「自然」はこれまで明らかにしてきたように、『教行信証』の思索の展開上で考察されなければならぬのである。

このように踏まえた上で「自然法爾」法語の内容を若干吟味してみたい。かの法語は、その系統を異にする五本が現存しているが、『末燈鈔』所収本を除く四本は、その冒頭にまず「獲得名号」についての解説がある。

獲字は、因位のとさうるを獲といふ。得字は、果位のとさうにいたりてうることを得といふなり。名字は、因位のとさうのなを名といふ。號字は、果位のとさうのなを

號といふ。

(『定親全』三・五四頁)

この「獲得名号」についての一字一字の解説に続いて、「自然法爾」の文字のところが解説されていく。一読してみると、一見「獲得名号」と「自然法爾」とは、関連がない事柄のような印象を受ける。『末燈鈔』所収のものには「獲得名号」の解説はなく、「自然法爾」の文字のころを解説することから始まる。恐らくは『末燈鈔』が編纂されていく中で、「獲得名号」がこの法語とは無関係のものとなされ削除されるに至ったのであろうか。しかし、両者は決して無関係な事柄ではなく、むしろ「獲得名号」によって実現する内容を「自然法爾」に託して語った法語であると考へたい。

「獲得名号」は一字一字を「因果」に当てて解説がされている。これは決して親鸞にとつてこの法語にしか見ることの出来ない特別な表現ではなく、同じように『唯信鈔文意』においてもなされているのである。

「如來尊號甚分明」。このころは、如來とまふすは無尊光如來なり。尊號とまふすは南无阿彌陀佛なり、尊はたふとくすぐれたりとなり。号は佛になりたまふてのちの御なをまふす、名ははまだ佛になりたまはぬときの御なをまふすなり。

〔定親全〕三・一五六頁)

先に引用した法照の『五会法事讃』の一文であるが、これを解説する中で親鸞は「尊号」の「号」について「仏になりたもうてのちの御な」であると言い、続けてあえて「名」についても「いまだ仏になりたまわぬときの御な」と解説しているのである。このように「名号」を因果に配して解説するのは既に「唯信鈔文意」で見えているのであるが、更に続けて次のように述べることに注目出来よう。

この如來の尊號は不可稱・不可說・不可思議にましまして、一切衆生をして无上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御なり。(「同」同頁)

ここに親鸞の積極的な名号理解が提示されていると言えるであろう。名号とは衆生に無上大般涅槃を実現する御名であるというこの理解は、「自然法爾」法語と全く同じ境位が語られていると言えるのではなからうか。

法語では「獲得名号」に続けて、「自然法爾」の一字一字について文字のところが解説されている。ここでは繰り返し「行者のはからい」ではなく「如來のちかひ」であることが強調されている。その「如來のちかひ」とは、と続けて次のように言う。

ちかひのやうは、无上佛にならしめむとちかひたまへ

るなり。无上佛とまふすは、かたちもありません。かたちのましまさぬゆへに、自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、无上涅槃とはまふさず。かたちもましまさぬやうをしらせむとて、はじめて彌陀佛とぞ、き、ならひて候。みだ佛は、自然のやうをしらせむれうなり。

〔定親全〕三・五五―五六頁)

ここに示されているように「如來のちかひ」とは端的に言えば、衆生を「無上仏にならしめん」という誓いである。無上仏というのは無上涅槃と同じく形がないので「自然」という。つまり親鸞の了解から言えば、「自然」とは無上仏・無上涅槃を意味するのである。よって「弥陀仏は無上佛・無上涅槃を知らせる手だてであると述べていることになる。換言すれば、当然ここで言う弥陀仏とは「名号」のことを指すであろうから、名号のはたらきによって衆生に無上仏・無上涅槃が実現する道理を述べたものに他ならない。このように理解するならば、この法語が語るものとは、本願の名号を行信することによって「住正定聚」「必至滅度」の生に立つ道理、即ち難思議往生の内容以外の何物でもないことがおのずと知れるであろう。

おわりに

以上のように親鸞の「自」の読みに注目するところから、『教行信証』に見る親鸞の自然の思想を探究してみた。すでに論じてきたように、親鸞は「自」を「おのずから」と読むことによって自然の思想を表現しているのであるが、そこから読みとれることは、親鸞が行者の立場に立つて如来のはたらきを明らかにしようとする姿勢である。それは親鸞自らが立つた仏道、即ち大般涅槃道が一体如何なる仏道であるかを表現しようとしている中でなされる姿勢であると言えよう。具体的に言えば本願他力の名号によって実現する仏道であり、その仏道の道理を「自然」として表現しているのである。その姿勢は決して晩年に限られるものではなく、親鸞の一貫した思索であることは言うまでもない。

最後に「自然」を論究する際に落としてはならない視点は、「獲得名号」にあると強調しておきたい。注目すべき事柄として、『教行信証』において「自」を「おのずから」と読む箇所が「行巻」にあり、特に名号釈以後の引文で際だっていることが挙げられる。名号釈では「必得往生」の「必」を

必言「審也」然也「分極也」金剛心成就之兒也

〔定親全〕一・四九頁

と字訓を行い、「しからしむる」と述べることによつて「自然」の意味を賦与していると考えられる。更にその後、法照の『五会法事讃』で「自來迎」「念佛自成功」「彌陀決定自親近」に、そして憬興の『述文贊』で「不自獲果」にそれぞれ「おのずから」と訓じているのである。これらの引文は、名号釈を終えて他宗他派の諸師の教言を挙げることによつて、念仏が広く讃えられていることを示そうとするものである。この中で「自」を「おのずから」と読むことによって、親鸞は名号に一つの力用を表現しようとしていると考えられる。このように考えるならば、「自然法爾」法語の冒頭に「獲得名号」があるのも至極もつともであると感じられる。この点については、稿を改めて論じていくこととしたい。

凡例

出典は次の通り略記した。

- 『定親全』…『定本親鸞聖人全集』（法蔵館）
- 『真聖全』…『真宗聖教全書』（大八木興文堂）

註

- ① 「自然法爾」法語には内容を若干異にするが、専修寺藏頭智書写卷子本、「見聞」所収本、「聞書」所収本、「末燈鈔」所収本、文明五年「三帖和讃」末尾に載せられているものと五本があり、広く流布していたことが推測される。
- ② 森竜吉氏「自然法爾」消息の成立について」(『史学雑誌』六〇—七)
- ③ 中西智海氏「自然法爾」消息の意味するもの」(『研究論集』二三 相愛女子大学)
- ④ 星野元豊氏「現代に立つ親鸞」所収「自然法爾」(法蔵館)
- ⑤ 例えば、遠山諦虔氏が自然法爾には「つねに死して蘇える緊張した過程が内含されている」(『逃避と超克よりみた自然法爾の立場』『宗教研究』一九〇号)と述べるのを見れば、先の星野氏が語る「心豊かに、安心しきって生きぬいた」心境という見解とに大きな隔たりを感じるであろう。
- ⑥ 拙稿『大無量寿経』の「自然」—親鸞の視点から—(『真宗研究』第四十五輯)
- ⑦ 『真聖全』一・二七頁
- ⑧ 『大正蔵』37.163.b
- ⑨ 親鸞による『大経』の「自」についての読みは、「教巻」に二カ所、「行巻」「化身土巻」にそれぞれ一カ所ある。
- ⑩ その他、「真仏土巻」所引『浄土論註』の「言性者是必然義・不改義」(『定親全』一・二五一頁)が挙げられよう。
- ⑪ 『定親全』一・八八頁
- ⑫ 『定親全』三・一五九頁
- ⑬ 伊藤博之氏は『歎異抄 三帖和讃』(新潮日本古典集成)において「獲と得、名と号との区別を論じたこの前文と本文との関係はよくわからない」(一九〇頁)と「自然法爾」法語に註を付している。
- ⑭ 「獲」については「獲といふはうるといふことばなり、うるといふはすなわち因位るときさとりをうるといふ」(『尊号真像銘文』『定親全』三・八一頁)、「得」については「得は、うべきことをえたりといふ」(『一念多念文意』『定親全』三・一二七頁)の解説が挙げられる。
- (元本学特別研修員 真宗学)